第四回

教育相談の〝心〟(三)
不適切な行動の目的を理解する

会沢(あいざわ) 信彦(のぶひこ)
文教大学教育学部准教授

前号では、アドラー心理学の基本的な考え方について述べた。

本号では、アドラー心理学の発展に貢献した医師ルドルフ・ドライカースの理論を中心に、子どもの問題行動に関するアドラー心理学の考え方について述べることとしたい。

一　所属欲求の重要性

アドラー心理学では、人間にとって最も重要な欲求は、「集団の中で居場所を確保し、大切な存在であると認められたい」という所属欲求であると考えている。特に子どもにとってそのことは顕著であり、子どものさまざまな行動は、所属欲求を満たすために行われていると考えられる。

それらが適切な行動であれば何も問題はない。しかし、適切な行動では所属欲求が満たせないと考えると、子どもはやむを得ず不適切な行動（問題行動）で満たそうとする。その際、不適切な行動の直接的な目的が四つある（目的論）とドライカースは考えた。有名な、「不適切な行動の四つの目的」論である。

ところで、学級内での不適切な行動の「相手役」（対人関係論）は、学級の子どもたちか教師のどちらかである。しかし、多くの場合は、やはり子どもに大きな影響力を及ぼす教師であると考えられる。

二　不適切な行動の四つの目的

(一)注目・関心を引く

子どもが「先生は僕／私を認めてくれていないな」と感じると、子どもは、何か変わったことをして教師の注目・関心を引きつけようと考える。「先生の注目・関心を得ることができれば、自分には居場所が確保できるだろう」と考えるのである。

多くの教師は、子どもが教師の注目・関心を引こうとして起こす問題行動を、必ずといっていいほど目にしているはずである。その一方で、教師の〝お気に入り〟になろうとするなど、一見すると問題とは言えない行動によって教師の注目・関心を引こうとする子どもも存在する。

ところで、ドライカースは、「不適切な行動に対して教師がどのような感情を抱くか」によって、その行動の目的を見分けることができると考えた。注目・関心を引くための行動に対して教師が抱く典型的な感情は、「いらいらする」「うっとうしく感じる」である。

(二)権力闘争をする

注目・関心を引くための不適切な行動に対して教師が注意をすることは、まさに不適切な行動に注目を与えることである。すると子どもはますますその行動を繰り返し、教師は注意をエスカレートさせるという悪循環に陥る。つまり、教師は何とかして子どもに言うことを聞かせようとするあまり、子どもと対立関係に陥るのである。

すると子どもは、「僕／私は先生よりも強いんだということを証明することができ

れば、自分には居場所が確保できるだろう」と考える。そして、教師の指示に従わなかったり反抗したりすることで権力闘争を繰り広げる。

権力闘争を目的とした行動に対して教師が抱く典型的な感情は、「腹が立つ」である。

㈢復讐する

子どもと権力闘争に陥っている教師は、力ずくででも子どもに言うことを聞かせようとするであろう。その場合に予想される子どもの行動は、反抗の炎をますます燃え上がらせるか、さもなければ「今に見てろよ」とばかりとりあえず従うふりをするかである。いずれにしても、教師と子どもとの関係は悪化する一方である。

次の段階になると、子どもは教師に復讐することを目的として不適切な行動を行うようになる。「どうせ自分を好いてくれる人など誰もいないのであれば、せめて復讐することで居場所を確保しよう」と考えるのだ。大変ゆがんだ考え方であるが、子どもにとっては真剣なのである。

復讐を目的とした行動に対して教師が抱く典型的な感情は、「傷つく」である。

㈣無気力・無能力を誇示する

教師に復讐しようとしたところで、お互いを傷つけ合うだけで居場所を得られるべくも無い。エネルギーを使い果たした子どもは無気力になり、最後には「自分は何もできない、やる気のない人間である」ということを訴えることで居場所を確保しようとする。これもまたひどくゆがんだ考え方であるが、子どもなりの精一杯のアピールなのだと考えられる。

無気力・無能力の誇示を目的とした行動に対して教師が抱く典型的な感情は、「諦め」である。

ところで、これらの不適切な行動を示す子どもに対して、教師はどのように関われば良いのだろうか。アドラー心理学では、四つの目的ごとに、関わり方のセオリーを提唱している。これについては次号で紹介することとしたい。

三　発達障害のある子の支援とアドラー心理学

特別支援教育の本格実施とともに、LD、ADHD、高機能自閉症、アスペルガー障害などの発達障害に対する関心が高まっている。彼・彼女らは、障害に由来するさまざまな困難ゆえに、まさに教室で不適切な行動を起こすことも多い。

では、発達障害のある子の支援について、アドラー心理学の立場ではどのように考えれば良いのだろうか。

実は、発達障害児の不適切な行動は、発達障害だけが原因となっているわけではない。その証拠に、発達障害のある子どもの問題行動が、担任が替わることで改善する（あるいは悪化する）という事例をしばしば耳にする。

筆者は、発達障害があってもドライカースのこの考え方は十分に通用すると考える。むしろ、発達障害によるさまざまな困難ゆえに、子どもは所属に対するより強い欲求を持っていると考えられる。そして、所属の欲求が満たされないと感じることで、いわゆる二次障害として、不適切な行動が増幅されるのである。

〈参考文献〉
ドライカース、キャッセル（松田荘吉 訳）『やる気を引き出す教師の技量』一光社